千歳会
CHITOSEKA

vol. 14
2026.1

千歳会オリジナルメディア

アスサキ

CONTENTS

●巻頭メッセージ　アクティビ理事長がゆく
●新春特集　施設長が語る
●千歳会グループからの新春挨拶
●ちとせ便り　千歳会感謝祭’25

こまち墨田館

ケアハウスちとせ

ちとせ小町

三山園

みはま

ちとせ北本

ちとせ稲毛

巻頭メッセージ

アクティビ理事長がゆく

安心・安全な食と心豊かな暮らしを目指して

今号から「アスサキ」の誌面を刷新いたしました。新誌面の冒頭では〝自らの理念のもと積極的に行動する左 理事長〟が、千歳会に携わる皆さんに自身の考えを披瀝していきます。

明けましておめでとうございます。今年もよろしくお願いします。

年始のご挨拶として今回は、当法人の理念の一つ「美味しくいただく食事」「食べる喜びを諦めない」の「お米」についてお話させていただきます。

僕は当法人施設のご利用者である入居されている皆様のことを「お客様」、そしてそのご家族の皆様を「お客様のご家族」とお呼びしていますが、普段は「おじいちゃん、おばあちゃん」と呼ぶことが多いです。

お客様が「好きな時間に起きて、食べたい時に食べて、入りたいときにお風呂入って、好きな時に寝る」。これが自分の家だと日常で当たり前なのに、施設に行くと規則正しい生活に管理される。僕はそこまでを変えたいなと思っているんです。これは各施設長も同じ考えのはずです。

言い換えると、ベッドから起きる理由が何かっていうことが重要で、お味噌汁の匂いで朝起きるおじいちゃんが「腹減った」なんていいですよね。

楽しそうなカラオケレクリエーションの声かけがあれば、「ちょっと喉を鍛えに行こうか」もいいし、ステーキを焼いている匂いがすれば 厨房まで行って「ちょっとつまみ食いさせてくれ」なんていうのもいいじゃないですか。

つまり生活に魅力を与える工夫をしていくことが必要だと思うんです。

365日1日3回食べることは、それを楽しみにすることがとても重要です。でも食事を施設長が作るわけではありませんから、会社としては「うまい飯を作る会社」がちゃんとあって、うまい飯を作ろうとする人たちが、ちゃんとそこにいることが重要で、介護施設よりも外部というところにより要望を伝えて、そこがブラッシュアップさせた状態を作りたいなと思っているんです。

最後の晩餐

特養1施設には100人のお客様がいらっしゃるので365日を3分の1で割れば、3日に1回はおじいちゃんたちの誕生日があることになります。

いつか最後の晩餐を迎えるとき、「何食べたい?」って質問したときに、それを作ってあげられたら最高だなって思っています。

施設で提供している食事ですが、お米の価格を1円2円ケチるとご飯の味が全然違うんです。

僕は最後の晩餐はうまい米を食いたいと思うんです。だから施設で生活しているお客様に、熱々の出来立てのご飯の一番おいしい米を提供すれば完食できる。美味しいご飯を出すだけでお客様たちの食べる意欲が出てくる。生きる力が湧いてくる。素晴らしいじゃないですか。だから主菜はやっぱり米だっていうところに、こだわりを持ちたいなと思っています。

イベントである食事

街のイベントショップのように食事の予告をポスターにして、土曜の丑の日には鰻の蒲焼、いついつはお刺身の日とポスターが貼られていたりとか、おかずの曲が流れていたりとか。それを1週間、1か月先の生き甲斐

にしてもらっていいと思うんです。

それを楽しみにしていると「今夜は何が出るの？」ではなく、次回のお寿司は○月◇日に出してくれるから、生きる目標にセットアップされてもいいのかなと思うんです。

先の楽しみがないと結局は朝起きてご飯食べさせられて、昼飯食わされて夜も食わされた。それだと本来の自分の姿じゃなくて、施設側が提供している時間に生きているだけだからつまらないでしょう。

ご馳走の予告をポスターにして貼っておけば、お客様はそれを楽しみにする。まさにその人の時間に変わるので、この仕掛けは日本給食サービスの山本社長と施設長に期待したいです。

今回の米不足で必要なお米の獲得に奔走していただいたのも山本社長で、農業法人との契約にもご苦労をおかけしました。本当に感謝しています。

本気でお米を作る

実は「いきいきらいす」という商標登録を、5年前に取得しています。

自分たちで自給自足できる環境を作りたいなと考え、そして自分たちで作るなら独自ブランドの名前を取りたかったからです。

ご承知のように、昨年はお米の高騰と品不足に悩ませられました。これは法人として将来第一次産業の農業に参加したいと考えているからですが、今回は米作り農業法人と契約できましたので来年のお米は心配なくなりました。

そして将来的にですが、米はお客様の口に入るものだけれど、生産する場面もソーシャルワークとしてお手伝いできる気がしています。

農業に参画したいと考えた理由は、介護講習や講演で全国を回っている際に、都市部だけが都市化されて2時間出ればもう米所だと気が付いたからです。この国は先進国と言われながらも一時産業がほぼ大きなシェアを占めているのに、自分たちがお米にこだわりを持つ以上お客様の口に入れるまでの責任を持ちたいなと思って、米を作ることができたらいいと考え進めてきました。

そして自分たちで作るなら独自ブランドの名前を取りたかったのです。「いきいきらいす」のパッケージは僕の顔写真を入れました。アパホテルの社長みたいな感じですけれど、やはり写真を載せてトップがちゃんと本気でやっているんだっていうのを見せないと、口に入るものは食べる喜びの前に安心と安全がないといけないと考え気合いを入れました。

昨年秋に稲刈りに行って稲刈りコンバインを操縦したのも、僕からの本気メッセージだからです。将来的には野菜も作っていきたいと思います。

就労施設としての米づくり

農業もDX※とテクノロジー技術が発達し、遠隔操作でいろいろできるようになってきています。まだ先の構想になりますが、法人として一次産業を始めると米の生産管理をする場所が必要になってきます。そこを障がいのある子供たちの就労場所として活用したいと考えています。

障がいのある子供たちにも納税してもらいたいなという考えが根底にあり、農業への参加によって彼らが自分たちで納税できるようになるというのは、親御さんたちも安心する材料となります。そこまでを社会福祉法人として、社会とつながるお手伝いをするべきかなと考えています。

※次回はレクリエーションについてお話します。

※DX：デジタルトランスフォーメーション。デジタル技術を活用して、企業のビジネスモデルや組織文化を根本的に変革し、競争力を向上させること

新春特集

施設長が語る

新春特別企画として、千歳会7施設の施設長・管理者にインタビューを実施しました。千歳会の理念をはじめ、彼らが語る信念や今後の展望、そして仕事にかける思いを通じて、私たち千歳会の文化や未来へのビジョンを深く理解できる内容となっています。熱意とリーダーシップが伝わる貴重なインタビューをご一読ください。

社会福祉法人千歳会 法人本部
特別養護老人ホーム ちとせ稲毛

〒263-0012
千葉県千葉市稲毛区萩台町 50-1
Tel：043-445-7840　Fax：043-445-7832
Mail：info@1000.or.jp（法人本部）
Mail：info-inage@1000.or.jp（ちとせ稲毛）

社会福祉法人千歳会 法人本部 分室

〒103-0002
東京都中央区日本橋馬喰町 2-4-5-3F
Tel：03-6908-7777　Fax：03-5651-7667
Mail：info@1000.or.jp

特別養護老人ホーム ちとせ北本
居宅介護支援事業所 ちとせ北本

〒364-0001
埼玉県北本市深井 3-25-1
Tel：048-579-5110　Fax：048-579-5114
Mail：info-kitamoto@1000.or.jp

特別養護老人ホーム ちとせ小町
デイサービスセンター ちとせ小町

〒285-0043
千葉県佐倉市大蛇町 215-7
Tel：043-312-5111　Fax：043-312-5112
Mail：info-komachi@1000.or.jp

特別養護老人ホーム 三山園
デイサー ビスセンター 三山園

〒274-0072
千葉県船橋市三山 2-3-2
Tel：047-476-2885（特養・ショートステイ）
Tel：047-493-2208（デイサービス）
Fax：047-474-3873

ケアハウス ちとせ
訪問介護ステーション ちとせ
居宅介護支援センター ちとせ
デイサー ビスセンター ちとせ

〒285-0836
千葉県佐倉市生谷 75-10
Tel：043-464-1577　Fax：043-460-5776
Mail：info-chitose@1000.or.jp

ケアハウス こまち墨田館

〒131-0045
東京都墨田区押上 3-61-4
Tel：03-6657-5690　Fax：03-6657-5691
Mail：info-sumida@1000.or.jp

居宅介護支援センター みはま

〒261-0004
千葉県千葉市美浜区高洲 4-1-9 郁栄ビル 2F
Tel：043-307-4711　Fax：043-307-4712

「ここに来て良かった」と思っていただける施設を目指して

ちとせ稲毛
施設長
鈴木　健太

『ちとせ稲毛』は、設立5年とまだ新しい特別養護老人ホームです。発展途上の部分も多いのですが、同時に「新しいことに挑戦しやすい」という大きな強みにもなっています。

当施設の自慢は、何よりも前向きで協力的な職員たちです。30代、40代の若い世代が中心となり、新しい企画や取り組みに対して「まずはやってみよう」と、積極的に関わってくれる柔軟な風土がここにはあります。施設長である私からの発信だけでなく、ゆくゆくは現場の職員から「こんなことをやってみたい」という声がもっと上がってくるような、活気あふれる組織にしていくことが目標です。

私たちの活動の柱の一つは、地域との積極的な交流です。これまで、地域の皆様にもご参加いただけるプロレスや夏祭りなどのイベントを開催してまいりました。特に、遊びに来てくれる子どもたちの元気な姿は、お客様にとって何よりの刺激となり、満面の笑みがこぼれる、かけがえのない時間となっています。それでも、地域における私たちの認知度はまだ十分とは言えません。

今後は、地域の方々がより気軽に立ち寄れる場所となることを目指して、子ども食堂の開設も計画しています。施設の中から地域へ、そして地域の方々を施設の中へ、双方向のつながりを深めていきたいと考えています。

そして、最も大切にしているのは、お客様ご本人とご家族様に

「ちとせ稲毛に入って良かった」と心から感じていただくことです。「特養だから」という理由で、負い目を感じたり様々なことを諦めてほしくありません。その思いから、私たちはお客様の「やりたい」「食べたい」という声を形にする取り組みに力を入れています。

その一つが、食事のレクリエーションです。栄養バランスの整った施設の食事はもちろん大切ですが、時には無性にジャンクフードや甘いものが食べたくなることもあるでしょう。私たちは、マクドナルドやミスタードーナツといったお店の商品をご提供させていただくことで、日常の中に「選ぶ楽しみ」や「好きなものを食べる喜び」を感じていただける機会を作っています。

また、施設内で開催する「買い物イベント」も好評をいただいている取り組みです。食品や衣類などを施設内に並べ、ご家族様と一緒にお買い物を楽しんでいただくこのイベントでは、私たちが予想もしなかった発見がありました。

おやつなどの食べ物よりも、多くのお客様が熱心に手に取られたのは、意外にも洋服だったのです。「いくつになってもおしゃれを楽しみたい」という皆様の気持ちに触れ、私たちは改めて、生活に必要なものをご提供するだけでなく、心を豊かにする体験をお届けすることの重要性を実感しました。ご自身で選んだ一着の服が、日々の生活に彩りと輝きを与えてくれる。そんな瞬間に立ち会えることが、私たちの大きな喜びです。

介護業界は人手不足という大きな課題を抱えていますが、だからこそ今いる職員たちと知恵を出し合い、協力し合いながら、お客様一人ひとりの思いに寄り添うケアを追求していきたいと考えています。これからも、ちとせ稲毛に関わるすべての方々の声に耳を傾け、「ここに来て良かった」と感じていただける温かい施設づくりに、職員一丸となって邁進してまいります。

ちとせ北本が目指す「ハッピーエンド」のお手伝い

ちとせ北本
施設長
渡辺　梨苗

『ちとせ北本』の最大の強みは、緩和ケア認定看護師の資格を持つ看護主任が在籍していることです。「緩和ケア」とは、終末期における心と体の苦痛を和らげるケアのことで、私たちはこの分野に特に力を注いでいます。それは、人生の最終章を迎えられたお客様とそのご家族様に、心穏やかで温かい時間を過ごしていただきたいという強い思いがあるからです。

私たちの看取りケアは、ご逝去されるその瞬間まで、ご本人様の「したい」という気持ちに寄り添

うことから始まります。先日、100歳で旅立たれた方は、焼き芋が大好きでした。そこで、施設に焼き芋機を持ち込み、ご家族様とご一緒に熱々の焼き芋を召し上がっていただく機会を設けました。ご本人はもう食事を摂ることも難しい状態でしたが、召し上がり時の嬉しそうな表情と、それを見守るご家族様の笑顔は、私たちの何よりの喜びです。

ちとせ北本が何よりも大切にしているのが、ご逝去された「後」のケアです。ご家族様と職員が一緒になって、故人様のお体を清めるための入浴介助を行っています。思い出話を伺いながら、共に湯灌（ゆかん）をさせていただく時間は、ご家族様にとって大切なグリーフケアの時間になると信じています。その後は、職員や他のお客様も一緒にお花を手向け、全員で玄関先までお見送りをします。

当施設に入居していた私の祖父が2025年10月に亡くなった際も、同様のお見送りをしていただきました。職員やお客様たちに囲まれ、温かく送り出してもらえたこと、そして祖父の最期に寄り添えたことにただただ感謝しかありません。自らの経験を通して、ご家族様が「すべてやりきった、良かった」と感じられるお見送りを、すべてのお客様に提供していく決意を新たにいたしました。

それを実践するために、私たちは「断らない介護」「辞めない職場環境づくり」「地域とのつながり」という3つの柱を掲げています。近隣では受け入れが難しい医療依存度の高い方々も積極的に受け入れ、その人を知ることで個別のケアがしっかりでき、職員が安心して長く働けるように職員とお客様が「馴染みの関係」を築ける職場環境を整えるよう努めています。さらには、こども食堂の開催や、北本市主催のカレーフェスティバルへ「ちとせ北本トマトカレー（北本市認定）」の出店などを通じて、地域に開かれた施設でありたいと考えています。

千歳会が掲げる「ハッピーエンドを創造する」という行動指針のとおり、お客様とご家族様、そして私たち職員にとっても「ちとせ北本で良かった」と思っていただける、そんな温かい場所であり続けること。それが私たちの目指す姿です。今後は、この看取りの取り組みを冊子にまとめたり、モデルケースとして千歳会の他施設と連携したり、一般の人向けの研修会を開催したりと、私たちのケアを広く社会に伝えていく活動にも挑戦してまいります。

人と人とのつながりが、私たちの最大の強みです

ちとせ小町
施設長
南曲　豪

『ちとせ小町』は、当法人の特別養護老人ホームの中で最も歴史が古く、開設から14年が経ちます。正直に言えば、建物の設備面では新しい施設に及ばない点もありますが、私たちにはどこにも負けないと自負している強みがあります。それは「人のつながり」、すなわち職員のチームワークです。

私たちの介護現場は、介護主任のもと2名のフロアリーダーが中心となり、現場で起こる様々

な課題に迅速かつ的確に対応できるシステムがしっかりと構築されており、職員同士がギスギスすることなく円滑な連携が取れています。また、当施設はユニット型でありながら、廊下で各ユニットがつながっている回廊式の構造になっています。この物理的な環境も、職員間のコミュニケーションを活発にし、フロアを越えた助け合いを日常的なものにしてくれています。おかげで現場の良い点も悪い点も、率直な意見が私の元まで届く非常に風通しの良い職場環境が実現できています。

もう一つの大きな強みは、外国人職員への手厚いサポート体制です。現在、全職員の約3分の1を外国人職員が占めていますが、私たちは施設独自で、彼らのための研修を毎月2コースに分けて実施しています。

一つは日本語能力が高い職員向けの、緊急時対応など高度な知識を学ぶコース。もう一つは、まだ日本語に不安がある職員向けに、配膳の仕方や箸の向きといった日本の文化や習慣から丁寧に教える入門コースです。自分たちでテキストを用意し、一人ひとりの習熟度に合わせた研修を行うことで、彼らが安心して働ける環境を整えています。こうした取り組みが実を結び、国籍に関係なく職員同士が非常に仲良く、時には一緒に食事やバーベキューに出かけるほどの良好な関係を築けていることが、私の誇りです。

また、私たちは地域に開かれた施設を目指し、ボランティアの皆様との交流も積極的に行っています。ピアノやウクレレ、アコーディオンの演奏会など、多くのボランティアの皆様が施設を訪れ、音楽の楽しさを届けてくださいます。普段とは違う刺激に、入居されているお客様が心からの笑顔を見せてくださる瞬間は、私たちにとって何よりの喜びです。

もちろん、課題がないわけではありません。建物の老朽化や、専門職種間の連携強化など、改善すべき点は多々あります。しかし、課題があるからこそ、私たちには成長の機会があるのだと前向きに捉えています。何か壁にぶつかった時、私たちは「一人ひとりの人生を豊かに」という法人理念に立ち返ります。何がお客様にとって最善なのかを常に考え、行動することが、私たちの使命です。

これからも、職員一人ひとりが仕事にやりがいと楽しさを感じ、その結果としてお客様に最高のサービスを提供できる。そんな温かい雰囲気と人のつながりにあふれた施設であり続けられるよう、職員一同、心を込めて努めてまいります。

50年の歴史を背負い、千歳会の風を吹かせる

特別養護老人ホーム
三山園　施設長
菅原　淳

「息つく暇もない」――。今の心境を素直に表現するなら、まさにこの一言に尽きます。

私が『三山園』の施設長に就任したのは、令和7年10月、つい先日のことです。令和6年1月にちとせ北本に入職し、翌7年1月に三山園の開設準備室へ。そして同年4月、三山園が正式に千歳

会へと移譲されたタイミングで副施設長となり、気づけば組織のトップという重責を担うことになりました。目まぐるしく変化する環境の中で、私自身、走りながら考え、悩み、そして前を向いて進んできた1年でした。

三山園は昭和47年に設立された歴史ある施設で、半世紀近い歳月を地域と共に歩んできました。着任当初はその歴史の重みや、地域の方々との深い結びつきに圧倒されることもありました。

千歳会への移譲は、三山園に「新しい風」を吹き込むことでもありました。私たちはまず施設内の環境整備に着手しました。長年の慣習で雑然としていた配置を見直し、徹底的に整理整頓を行ったのです。その結果、見学に来られた地域の方々から、「だいぶ綺麗になりましたね」という声をいただけるようになりました。

変わったのは見た目だけではありません。ICTの導入もその一つです。これまで紙ベースだったアナログな記録業務を、タブレットやPCによる管理へと移行。長年、従来の方法で業務を行ってきた職員にとっては、大きな負担だったと思います。それでも、業務効率化と職員の労力を減らすためには避けて通れない道でした。

またイベントに関しても、力士を招いての餅つきイベントなど従来のものも継承しつつ、新たに千歳会独自の介護旅行を導入。これまで外出の機会が少なかったお客様が、「次はどこに行くの?」と目を輝かせるほどで、新しい風を入れて本当に良かったと実感します。

私の役割は、過渡期にある三山園を安定させ、次の世代へとバトンをつなぐことです。現場スタッフには常々「失敗を恐れずに挑戦してほしい」と伝えています。何かあれば私がカバーする。だから守りに入らず、お客様のために何ができるかをもう一歩踏み込んで考えてほしいと伝えています。

千歳会には、リハビリに強い老健施設など多様な連携先があります。老健では在宅復帰が難しいと判断された方でも、特養である三山園なら受け入れられます。そうしたグループの強みを活かし、ご家族様に「ここなら安心だ」と言っていただける「終の住処」を提供することが私たちの使命です。

施設長としてはまだ駆け出しの身ですが、毎日フロアを回って入居されているお客様一人ひとりの顔を見て、言葉を交わすことだけは欠かしません。三山園は生まれ変わろうとしています。伝統を重んじつつも、新しい挑戦を恐れない。そんな「千歳会らしい三山園」を、職員全員で作り上げていきたいと望んでいます。

人生のゴールデンタイムを、この場所で

ケアハウスちとせ
施設長　社会福祉主事
髙寺　誠

私が施設長を務めます『ケアハウスちとせ』は、デイサービスセンター、訪問介護事業所、居宅介護支援事業所を併設している施設で、千歳会の中でも一番歴史の古い施設です。設立は2000年、千年紀にちなんで「千歳会」と名付けられたと聞いてい

ます。もとは「あけぼの会」という名前で準備が進められていたという古い資料を見つけた時は、この場所が紡いできた歴史の長さを改めて感じました。

私たちのケアハウスの自慢は、何と言っても食事です。2階の厨房で職員が毎日手作りしており、その味は法人内で一番だと自負しております。入居されているお客様は60歳以上で自立した生活を送るお元気な方々ですから、私たち職員が普段食べるものと変わらない、季節感あふれる美味しい食事を召し上がっていただいています。調理スタッフの中には元お寿司の板前もおり、皆様の前で腕を振るってもらうイベントを企画しているところです。

また、ここは高台で見晴らしが良く、天気の良い日には筑波山も望めます。実はこの一帯は縄文時代の遺跡だそうで、畑を耕していると土器の破片が出てくることもあるほど、古くから人々が暮らしてきた豊かな土地なのです。皆様には、こうした恵まれた環境の中で、シニアヨガやカラオケ教室、生け花など日々のレクリエーションを通して、穏やかで彩りのある毎日を送っていただきたいと願っています。

私自身は、もともと福祉用具の会社で営業をしており、介護の現場は未経験でした。令和元年に千歳会に入職し、右も左も分からない中で、地域の方々に本当に助けていただきました。市・地区の社会福祉協議会や民生委員の方々、近隣の法人さんにまで頭を下げて教えを乞い、関係を築いてきました。今では「高寺の面倒は俺が見てやっている」と思ってくださる方が市内に何人もいらっしゃることが、私の財産です。

冒頭申しあげたとおり、当施設はデイサービス、訪問介護、居宅介護支援事業所が併設されています。各事業の管理者たちは本当に優秀で、連携もしっかりしており、私は彼ら・彼女らを心から信頼しています。だからこそ、私は施設長として安心して全体を見守ることができるのです。スタッフたちは皆、「ここでの暮らしは、仕事や子育てを終えた皆様にとっての『人生のゴールデンタイム』だ」という思いを共有しています。お客様ご本人だけでなく、遠方にお住まいのご家族にも安心していただけるよう、日々の暮らしを大切におもてなしする。その姿勢は、私たちの何よりの誇りです。

施設の老朽化や人手不足といった課題はありますが、地域に開かれた施設として、今後は子ども食堂のような取り組みにも挑戦したいと考えています。これからも「この地域に千歳会があって良かった」と思っていただける存在を目指し、職員一同、心を込めて努めてまいります。

地域と共に歩む ケアハウス墨田館の新たな挑戦

ケアハウスこまち墨田館
施設長　介護福祉士
佐々木　映三

私が社会福祉法人千歳会の一員となり、『ケアハウスこまち墨田館』に施設長として着任したのは、2024年4月のことでした。前職でも小規模多機能施設やグループホームで管理者を務めてい

ましたが、当施設に来てまず感じたことは、入居されているお客様がとてもお元気だということです。ここは自立支援の人向けの施設ということもあり、皆様の活力に満ちた日常がとても印象的でした。

着任してから2年近くが経ちますが、私が最も力を入れてきたのは地域とのつながりを深めることです。当初は、管理者がわずか1年で交代するという状況が続いていたため、地域の方々やケアマネジャー様、関係機関の皆様から「どうせまたすぐに変わるのでしょう」という目で見られていることを痛感する日々でした。しかし2年目を迎え「まだここにいますよ」と自分の言葉で伝え続けたことで、徐々に信頼関係が築かれ、地域との連携が大きく前進しました。

現在では、施設を地域交流の拠点として開放し、様々なイベントを開催しています。他施設同様、書道教室やシニアヨガ教室、音楽コンサートの他に、墨田区と連携した高齢者向けスマホ教室や、千葉大学と共同でレタスの水耕栽培に取り組む独自プロジェクトも実施しました。特に水耕栽培では、入居されているお客様が収穫したレタスをサンドイッチにしてみんなで味わうという貴重な体験ができました。

こうした活動を通じて、地域の皆様に当施設のことを知っていただく機会が増え、時には書道教室で使う半紙や筆などを寄付していただくなど、温かいご支援をいただけるようになったことは何よりの喜びです。

もちろん課題もあります。建物が築8年ということもあり、物置が不足していたり、廊下に空調設備がないため夏は暑く、冬は寒いといった設備面の悩みも抱えています。

それでも私にとってこの仕事の最大のやりがいは、お客様と直接お話しする時間です。皆様から施設長ではなく、親しみを込めて「館長」と呼ばれるたびに、ここにいることの喜びを実感します。皆様にはご縁があってこの場所を選んでいただいたのですから、1日でも長く安心して過ごしていただきたい。それが私の切なる願いです。ケアハウスという特性上、看取りまで行うことはできませんが、医療や介護の専門家の力をお借りしながら、皆様が次のステップに進むその時まで、しっかりと寄り添い、支えていきたいと考えています。

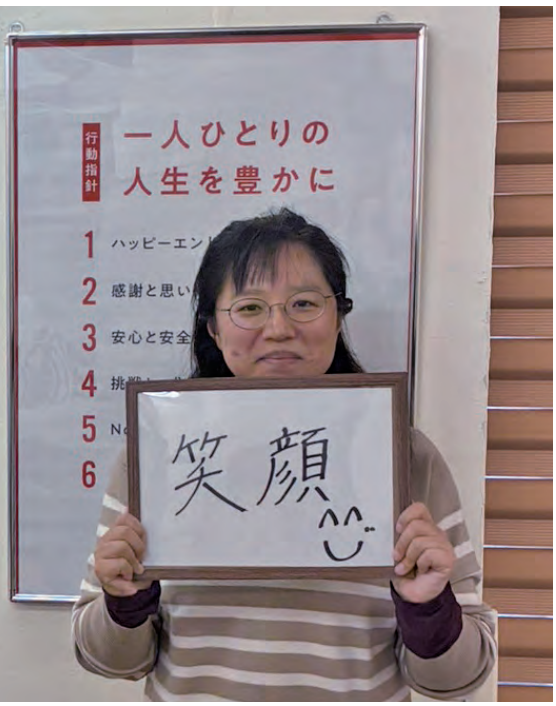
将来的には、ヘルパー事業所や小規模なデイサービスを併設し、皆様を最後まで自分たちの手で見守ることができたら、という夢も持っています。今はまだ夢物語かもしれませんが、地域との連携をさらに深めながら、お客様にとって、そして地域の皆様にとってなくてはならない存在であり続けられるよう、これからも楽しみながら挑戦を続けてまいります。

お客様の想いを大切に：ケアマネジャーとしての使命と絆

居宅介護支援センターみはま
管理者　主任介護支援専門員
草薙　洋子

『居宅介護支援センターみはま』に籍を置くケアマネジャーは私を

含めて3名で、それぞれ別地区を担当しています。各自の持ち場を守りながら、離れていてもチームとして連携しています。私の担当エリアはここ美浜区内とその近隣、また同法人の三山園のショートステイとデイサービスを利用しているお客様です。三山園もゆくゆくは居宅介護支援事業所を開設する予定ですが、特に三山園近隣はケアマネが非常に不足していることもあり、介護保険サービスを利用したくてもケアマネがみつからないことが多々あるそうで、車を走らせて支援に向かっています。私は身体介護こそできませんが、ケアマネとして、お客様がその人らしく生きていくための環境を整えることに全力を注いでいます。



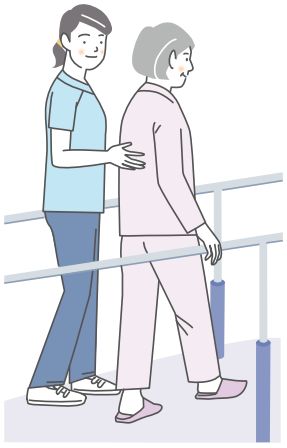
仕事をする上で最も大切にしていることは、「あくまでもお客様の意向を尊重する」こと。専門職の視点から見れば「こうした方が安全なのに」「もっとこうすればいいのに」と思うことは多々あります。しかし、ご自身の人生を全うするのはお客様ご自身ですから、私は最期までその方の「こうしたい」という声に耳を傾けるよう心がけています。

千歳会の強みは、施設間の連携の良さと、枠にとらわれないユニークさにあります。例えば、ショートステイの利用などで『ちとせ稲毛』と連携することが多いのですが、同じ法人内だと「ご飯の味がどうだった」といった細かなフィードバックも遠慮なく伝え合えますし、気難しいお客様でも安心してお任せできます。

また、イベントごとの多さも自慢の一つですね。稲毛へ行った際、施設内でプロレスを開催していて驚きました。お客様たちが大盛り上がりで楽しんでいる姿を見て、「ここはただ泊まるだけの場所じゃない、楽しみがある場所なのだ」と、お客様に自信を持ってご紹介できることは、ケアマネとして非常に心強い点です。

連携の強さを実感した出来事として、ある日、担当のお客様が転倒され、入院もできず「今夜どうしよう」という事態に陥ったことがありました。ダメ元で稲毛の鈴木施設長に相談したところ、遅い時間なのに駆けつけてくれ、緊急ショートステイを受け入れてくれました。あの時の安堵感と感謝は言葉になりません。困った時に助け合える仲間がいることは、何よりの財産です。当地域は社会資源が決して多くはなく、地域のケアマネさんとのネットワークが欠かせません。

この仕事のやりがいは、お客様からの「ありがとう」の一言に尽きます。それと寝たきりだった方がリハビリを通じて元気になり、介護保険を「卒業」していく姿を見ること。私が担当するお客様は、嬉しいことに、皆様お元気になられて卒業される方が多いんです（笑）。もちろん、人生の最期を見送る場面もありますが、ご本人の意向を尊重し、ご家族と共にやり切ったと思える瞬間には、静かな達成感があります。これからも笑顔を絶やさず、お客様の「生きたい生活」を支える伴走者でありたいと思っています。



千歳会グループからの新春挨拶

千歳会には、各施設の運営をサポートしてくれる仲間がいます。2026年の新しい年を迎え、グループの皆様から温かい新年のご挨拶をいただきました。日頃のご支援とご協力に感謝し、引き続き共に成長していくことを願っております。お三方から寄せられた新年のメッセージ、今後の展望などについてご紹介します。

日本給食サービス株式会社

代表取締役
山本　憲司

HPはこちら
⇩

「食べたい」に応えたい。食の工夫と未来への展望

私はもともと地元の愛媛で、給食の委託事業の会社をやっていました。そこを閉めた後、縁あって給食事業のノウハウを持った人を探している左理事長とお会いすることになりました。「食べる喜びを諦めない」という理念や情熱を熱く語る姿に心を打たれ、一緒に仕事をしたいと思い、愛媛で私の右腕として仕事をしてくれていた方と一緒に上京したのです。

私たちが施設の食事で何よりも大切にしているのは、お客様に「食の喜び」を届けたい、その一心です。昨今は食材費の高騰が著しく、特にお米の価格上昇は深刻で、安定した仕入れが課題となっていました。しかし、協力会社からの紹介により千葉県の米農家と直接契約する道筋がつき、安定供給に目処が立ちました。

また、魚や卵一つとってもどんどん高騰しており、決められた予算の中で栄養バランスを整え、かつ満足していただくのは本当に大変なことだと痛感しています。

ですが、その中で何ができるかを常に考え、可能な限りの工夫を凝らしています。例えば、熱心な栄養士さんが市場で見つけた旬のぶどうを、たとえ一人5粒ずつでもお出しする。それだけでお客様の表情がぱっと明るくなるんです。夏には私が自前の鉄板を持ち込んで、施設の庭で焼きそばを焼くこともあります。目の前で調理するライブ感と香ばしいソースの香りは格別で、寸胴で温めたものとは全く違うと、大変喜んでいただけます。

こうした取り組みは、時に私たちの想像を超える「ミラクル」を見せてくれることがあります。普段はペースト食しか召し上がれない方が、ご自身の力で食べ物を掴もうとされたり、普段は口数の少ない方が「美味しかった」と何度も話してくださったり。その方の「食べたい」という本能が、私たちの食事によって引き出された瞬間は、何物にも代えがたい喜びであり、この仕事の醍醐味です。

もちろん、嚥下食（えんげしょく）にもこだわりがあります。ただミキサーにかけるのではなく、食材ごとに分けて彩りを保ち、何の食材か分かるように形を整える。手間はかかりますが、見た目で楽しむことも食事の重要な要素だと考えています。

施設職員の方々の意識も非常に高く、特に外国人技能実習生が生き生きと笑顔で働いている姿は、施設の雰囲気の良さを象徴しています。このような素晴らしい環境の中で、これからも私たちは「食」を通じてお客様の幸せに貢献していきたいと考えています。まだまだやりたいことは尽きません。いつかはマグロの解体ショーも実現したいですね。

食は生きる糧です。これからもお客様が「食べたい」という気持ちに全力で応え、驚きと感動のある食事を提供し続けていきたいと思っています。

医療法人社団 敬徳会

施設サービス部部長
永野 慎一

HPはこちら
⇩

地域に根ざし、お客様と職員の未来へつなぐ老健の使命

私が所属しております医療法人社団敬徳会は、2年前に千歳会グループの一員として新たなスタートを切りました。もともとこの場所は、30年近くにわたり地域のリハビリテーション拠点として重要な役割を担ってきた歴史があります。その歴史と信頼を受け継ぎ、私たちは今、新たな挑戦の途上にいます。

私たちの施設は、介護老人保健施設（老健）です。老健の最も重要な役割は、病院での治療を終えた方々が、安心してご自宅での生活に戻れるよう支援する「在宅と病院の中間施設」であることです。入院生活で低下した体力をリハビリによって回復させ、ご自宅での生活に順応できるよう準備を整える。この「在宅復帰」こそが、私たちの最大の使命であると考えています。

そのために、入所サービスだけでなく、ご自宅から通ってリハビリを行う「通所リハビリテーション」や、スタッフがご自宅へ伺う「訪問リハビリテーション」も展開しております。入所から退所、そしてその後の生活までを一体的に支えるこの「三位一体」の体制が、私たちの大きな強みです。地域のケアマネジャー様や病院からも、私たちのリハビリテーション能力には一定の評価をいただいており、これからも機器の充実や職員の増員を通じて、さらに多様なニーズに応えていきたいと考えております。

もちろん、すべての方が在宅復帰できるわけではありません。ご自宅での生活が難しい方々には、次の生活の場を一緒に探していくことも私たちの重要な仕事です。その際、同じグループに特別養護老人ホームがあることは、お客様にとって大きな安心材料となっています。特に三山園は、私たちの施設と同じ多床室が中心で料金体系が近いため、お客様にご提案した際の関心も非常に高く、スムーズな連携が実現できています。

一方で、課題も少なくありません。特に、理学療法士や作業療法士といったリハビリ専門職の人材確保は、業界全体の大きな課題です。多くの学生は、キャリアのスタートとして急性期病院などを選ぶ傾向があり、新卒で老健を志望する人材はまだ少ないのが現状です。

これは、若いうちに病院で多くの経験を積みたいという彼らの思いの表れでもあり、一概に否定できるものではありません。しかし、

私たちは老健だからこそできるリハビリの魅力や、お客様の生活に深く寄り添うやりがいを発信し、そういう方もここで学び、成長したいと思える環境を整えていく必要があります。

私が目指すのは、「停滞のない、動きのある施設」です。お客様が必要な時に私たちのサービスを使い、リハビリを通じて元気になり、自信を持ってご自宅や次のステージへと笑顔で出発していく。その姿は、間違いなく職員たちの働くモチベーション、そして「やりがい」につながります。職員がやりがいを感じながら働くことができれば、施設の雰囲気はさらによくなり、サービスの質も向上します。この好循環を生み出すことこそが、施設を運営する私の役割です。これからも地域に信頼されるリハビリテーションの拠点として、お客様一人ひとりの人生に寄り添い、職員と共に未来へつながる介護を実践してまいります。

医療法人社団　活性会

安寿歯科　事務長
榎本　周平

HPはこちら
⇩

「食べる喜びを諦めない」ために。訪問歯科から描く、医療と介護の新たな連携

私どもは施設ではなく在宅の患者への訪問診療をメインとしており、半径16kmという広範囲をカバーしています。今後はより効率的に診療を行うため、エリアを絞って活動密度を高めていきたいと考えています。

千歳会様および医療法人社団敬徳会様とは深い連携関係にあり、千歳会様や敬徳会様のお客様に対して、訪問歯科診療をさせていただいております。千歳会様との本格的な連携が始まってから約3年。今では多くの施設で、ほとんどのお客様を拝見させていただくまでになりました。

私たちの理念は「すべての人の、食べる喜びをあきらめない」。これは、千歳会様が掲げる理念と通じるものです。この理念を現場で働く歯科医師一人ひとりに完全に浸透させることは、決して簡単なことではありません。それでも、私たちはこの旗を高く掲げ続け、お客様の「食べる」という希望を支える存在でありたいと強く願っています。

今後の展望として、この連携をさらに強化し、より専門的な形で「食支援」に貢献していきたいと考えています。例えば、嚥下機能を正確に評価できる喉頭鏡検査（VE）のような先進的な医療機器を導入することで、お一人おひとりに合わせた、より安全で適切な食事形態をご提案できるようになります。

また、安寿歯科では、現在、営業活動にも力を入れています。しかし、パンフレットをお配りするだけでは、本当に伝えたい私たちの価値は届きません。特にケアマネジャーの皆様に、より深く私たちの取り組みをご理解いただくためには、新たな発信が必要だと感じています。今後は「アスサキ」も積極的に活用させていただけたらと思います。

私たちが専門的な見地からお口の中の環境を整え、そして千歳会様が栄養と彩りを考えた「美味しい食事」を提供する。この二つが一体となることで、お客様のQOL（生活の質）向上につながり、「食べる喜び」は最大化されると信じています。これからも千歳会様と共に成長し、医療と介護が真に連携した新しい価値を創造していく所存です。

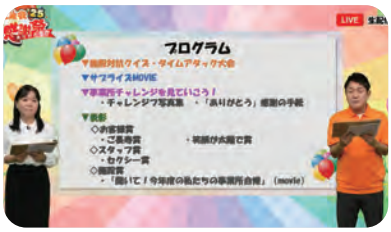
“感動の１日”の全容を誌上で再録します

令和７年11月14日、５回目となる「千歳会感謝祭 2025」が都内スタジオからの配信で開催されました。同感謝祭は職員をはじめ、ご入居されているお客様とそのご家族、お取引の方々など千歳会に関わるすべての皆様に、日頃の感謝の気持ちをお伝えするべく始まったイベントです。当日の全容を写真で振り返ります。

感謝祭をチェック

本番前のリハーサル風景

午後１時半、本番開始



司会は、ケアハウスこまち墨田館の佐々木施設長と、ちとせ北本の看護師・関口さん。

左理事長が開会挨拶

感謝祭は「お客様･ご家族」「職員」「グループ」への感謝を表す場であり、表彰などを通じて１年を振り返り、来年への活力や残り１か月の目標を考える楽しい時間にしましょう。

施設対抗ゲーム大会（全施設が参加）

- 各施設にちなんだ４択クイズ
- クイズ イントロドン
- 30 秒間で紙コップピラミッドを合計何個作れるか？

30 秒間でペットボトルを回転させて何本立たせることができるか？

ゲーム大会の優勝は、合計正解数 11 問のちとせ北本でした。

ゲスト挨拶／ゴリさん（カレッジセール／芸人）

私の父も老人ホームに入りましたが、プロによる丁寧なケアのおかげで非常に助かり、家族の負担や不和も解消されました。皆さんの仕事がお客様だけでなく、その家族の生活も支えているということに誇りを持ち、これからも頑張ってください。

面白く楽しく元気に！

ユニットレクではなかなか食べられない物を「面白く楽しく元気に！」というコンセプトで取り組んでいます。写真にして貼りだすと、ご家族様もその写真をカメラで撮影していたり「こんな顔見たことがない」と驚いている事もありました。
カメラを向けると大抵のお客様の笑顔がみられます。そんな笑顔を1枚でも多く残していきたいと思います

マカロン・マドレーヌユニット
仲野　薫

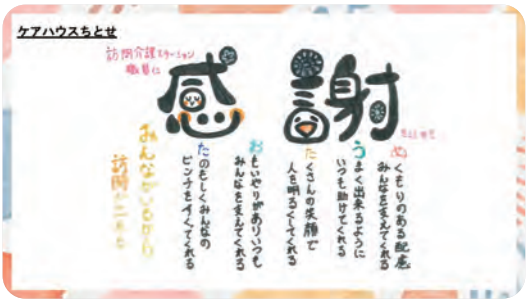
食への熱い想いをお客様と共に♫

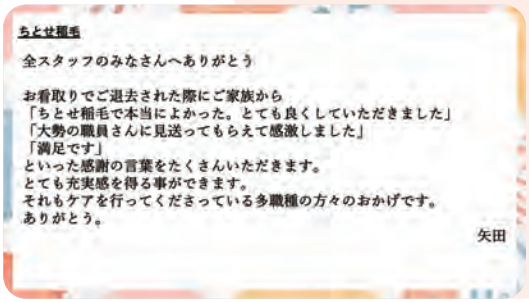
墨田館では、食を諦めない思いを胸に、お客様も職員も、食材を大切にしながら、楽しく調理をしています。
余った食材をアレンジして、美味しく食べています。

伊藤博一職員

職場のチャレンジ写真

「お客様の笑顔を見たい」。そんな思いを胸に、千歳会の各拠点は日々様々な活動を行っています。感謝祭では、その一部を紹介しました。





「ありがとう」感謝の手紙

感謝祭だからこそ「ありがとう」を伝えよう。皆さんの感謝を言葉にして集めました。49 通の応募があり、当日はダイジェストで紹介しました。

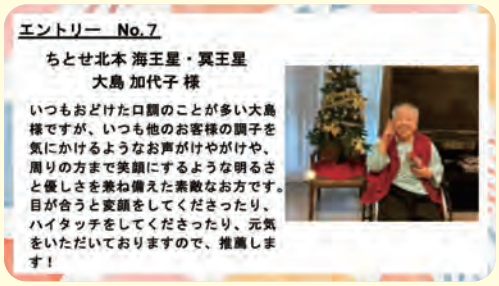
お客様賞（元気がいっぱいご長寿賞）

第 1 位：関口久恵（ちとせ稲毛）
第 2 位：皆川公子（ちとせ北本）
室岡陽子（三山園）
第 3 位：川北ミツ（ケアハウスちとせ）

100 歳以上（全 9 名）のお客様をお祝いしました。第 1 位のちとせ稲毛・関口さんは、踊りの先生だったので、夏祭りでは誰よりも踊ってくださいました。関口さんの笑顔と声は、職員の元気の源です。

笑顔が太陽で賞

法人全体の中から、日々施設内を明るく太陽のように周りを元気にしてくれるお客様をご紹介し、お祝いしました。エントリーは全 11 名で、最優秀賞はちとせ北本・大島加代子さんでした。



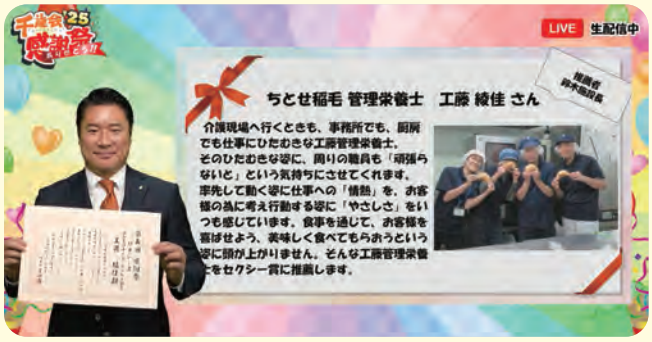
施設賞

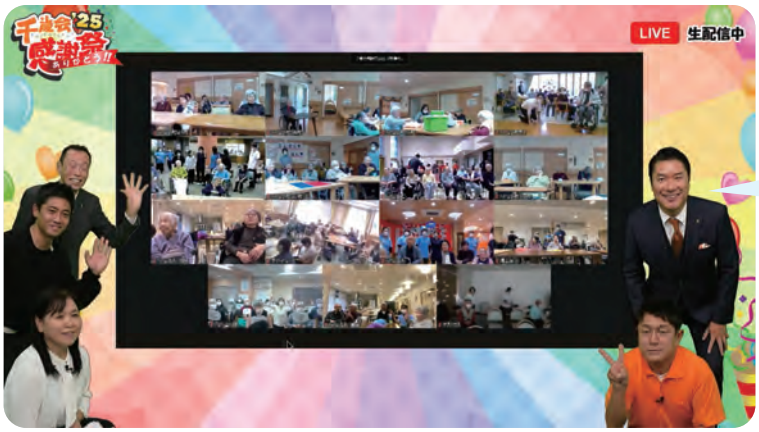
「私たちの事業所自慢」を 90 秒の動画にまとめて、エントリーいただきました。最優秀施設賞は、ちとせ稲毛が受賞。鈴木施設長と動画作成者の今村さんにトロフィーを、左理事長からは優勝旗が授与されました。

日々の実践を通じて、お客様やご家族、地域から厚い信頼を築かれました。スタッフ一人ひとりの努力と共同の力が、笑顔あふれる施設づくりを実現しています。これからも千歳会の誇りとして、ともに未来を歩んでいきましょう。

セクシー賞

仕事に対する姿勢や素敵な職員、周囲のスタッフに良い影響を与える職員を表彰しました。ノミネートは 8 名で、最優秀賞は ちとせ稲毛の工藤綾佳さん。左理事長からのメッセージとトロフィーが贈呈されました。





総括（左理事長）

日々の業務と「3 つの喜び」の実践に対し、深い感謝を申し上げます。今後はその喜びを支える基盤として、「健康増進」に注力してまいります。専門職として顧客の機能を高めること、そして将来自分たちがケアされたいと思える「気前のいい」温かな組織を作ることを要望します。後輩の模範となり、互いの夢を応援し合いながら、一人ひとりの人生を豊かにしていきましょう。